



銚子市長 越川 信一

昭和8年、千葉県下で2番目に市制を施行した銚子市は、昭和40年の9万1,492人をピークに人口が減り続け、平成27年の国勢調査人口は6万4,415人。5年間で5,795人が減少し、減少数は県下ワースト1位となった。

人口減少問題に立ち向かうため、平成27年10月に策定した銚子市総合戦略では、テーマを「確かな食楽仕（くらし）の形」とした。銚子にある豊かな自然・食・産業を磨き直し、暮らしの形を高めることによって、人を引きつける。移住定住を推進し、市民の生活そのものが観光資源になるようなまちづくりを目指している。朝獲れた食材を美味しく料理して、その場で食べてもらう。市民が毎日、美味しく食べているもの、楽しんでいるものを観光客にもおすそ分けする。「市民感覚のおもてなし」が観光振興の原点だと思う。

財政危機や市立病院の再生など、市行政が厳しい課題と格闘する一方で、「自分たちの手で銚子を元気にしたい」という若い力、市民主導のまちづくりのうねりが起こっている。

平成26年1月、銚子電鉄が脱線事故を起こし、修繕費用もままならない中で、立ち上がったのは銚子商業高校の生徒だった。「銚子電鉄の車両を走らせるために力を貸して欲しい」と全国に呼びかけ、クラウドファンディング（インターネットを使った資金調達）で500万円の寄付を集め、銚子電鉄の車両「2002号」を復活させた。その活動

は『銚子電メイクアッププロジェクト』として後輩たちに引き継がれ、昨年は199万円の寄付を集め、古くなった仲ノ町駅舎をリフォームした。銚子生みずからが壁の補修やペンキ塗りに汗を流し、ぬれ煎餅アイス、銚子メロンアイス、銚子キャベツメロンパンなど銚子の新名物を開発した。

シニア層にも共感の輪を広げ、まちづくり活動が拡散している。銚子の西部にある余山貝塚（縄文式土器が出土）では、地域住民が「余山貝塚美化の会」を結成し、竹藪を伐採し、憩いの広場を作り上げた。高田川では「高田川と共生する会」が結成され、県と市がボランティア活動を支援する「アダプトプログラム」の協定を結んだ。サケが遡上するための魚道も設置され、散策路の整備が住民の手で進められている。白石ダム周辺の美化と桜の植樹をめざして、「白石ダムに集う大地の会」が結成され、環境保全に汗を流している。キンメダイでおなじみの外川港地区では、「キンメのまち外川」をキャッチフレーズに、「うまいものフェア」、「かあちゃん食堂」などのイベントが行われている。「黒潮よさこい祭り」もみずから運営費を集めて開催するビッグイベントだ。

まちづくりの指針となる銚子市総合計画の策定をスタートさせた。「市民ワークショップ」を設け、市民提案を出し合いながら議論を深めている。市民が考え、市民パワーが銚子のまちを元気にする。そんな計画にしたい。